

荒木牧人作「アニマル・ファンタジー 弱虫アント」

< 前編 >

ママント ほら、アント(Ant = アリ)や、しっかり働いておいで。お前ももう行かなきゃいけないんだよ。

アント うん。でも僕はあなたの、ママント(Mom-ant = 母さんアリ)のそばにいたいんだよ。

ナレーション ここはある山のふもとにある一面緑の原っぱです。長い雨の時期も終わり、木も草も虫も鳥も生き生きとしています。

アント (モノローグ) あーあ。どうしてこんな僕がこの役目なのかな…。強くて頭がよくなきゃダメなんじゃないかな。僕は力も弱いし、ママントのそばにいたいし…。

ナレーション 輝く太陽をまぶしそうに見上げながら、小さくつぶやいている彼の名はアント。女王アリのママントから生まれた64番目の兵隊アリです。しかし大変な甘えん坊のアントは、今まで自分の役割をちゃんと果たしたことがありません。つい先日起こったハサミムシの襲撃の時も、巣の一番奥にあるママントの部屋で、ママントにしがみ付いて震えていました。

アント (モノローグ) 僕は働きアリになりたかったんだ。どうして兵隊アリに生まれちゃったんだろう。

ナレーション 数多くの戦いによって鍛えられる鋭いあごや太い足をアントは持っていません。生まれたときから役割分担が決まっているアリの世界では、転職はありません。アントは深いため息をつきました。

アント (モノローグ) あーあ、歩哨^{ほしやう}巡って、何て面倒なんだろう。…あ、そうだ!

ナレーション そう言うと、アントは歩く方向を変え、高くそびえたつ草のトンネルを抜け、大きなケヤキの木の前まで来ました。

アント こんにちは -。

ストーンマウス ん? アント君か? こんにちは。

アント いい天気ですね、ストーンマウスさん。調子はどうですか?

ナレーション ケヤキの木の根元にじっとしている一匹のネズミに、アントは話し掛けました。ストーンマウス、“石ネズミ”とは、石のように全く動けない状態なので、アントがそう呼ぶようになったのです。

ストーンマウス 大分よくなった。アント君のお陰だよ。ありがとう。しかしどうもまだ目がよく見えん。どうしたもんだらう。

アント 大丈夫ですよ。ゆっくり休めば見えるようになりますよ、きっと。

ナレーション ストーンマウスは、ずいぶん前からこの原っぱに住んでいます。フラフラとおぼつかない足取りで巡回していたアントが、このケヤキの木の下に倒れている彼

を偶然見つけ、助けたのです。ストーンマウスは人間の町に住んでいたのですが、ある日突然、人間が仕掛けた毒チーズで、仲間がバタバタと倒れ始め、怖くなった彼は意を決して、町から離れたのです。でも、自分の体にも毒が回り、気がついたらこの場所に倒れていたのです。

アント 僕は兵隊アリだから、物とかは本当は運べないんだけど…。絶対に内緒と約束して食べ物を運んできてあげたんですよ。

ストーンマウス 本当にありがとう。アント君がいなかったら、飢え死にるところだった。

アント 今日は何が食べたいですか？ 毎日同じ木の実じゃ飽きちゃうでしょ。ストーンマウスさんの好物、取ってきて上げますよ。

ストーンマウス そうだね。毒の入っていないチーズをおなかいっぱい食べたいな。

アント チーズ…？ 何ですか、それは？

ストーンマウス そうか、チーズを知らないか。おいしいんだよ。ぎっしりと詰まった食べ物で、口の中で滑らかにグルンと回って、トロリと溶ける感じなんだ。

アント グルンと回って、トロリと溶ける…。ストーンマウスさん。チーズ食べてみたいです。

ストーンマウス よーし。じゃあ、この目がよく見えるようになって、動けるようになったら、別の町に出かけて、たらふく食べて、アント君にも持ってきてあげよう。

アント ほ、ほんと？ うれしいなあ。

ナレーション 喜んだアントは、ストーンマウスに別れを告げ、初めて兵隊らしく元気に歩き出しました。空は青く、白い雲がポツカリ浮いて静かに流れています。巣のほうに戻ると、働きアリたちが並んで巣に食料を運んでいました。

セミ親方 さあ、みんな頑張れ。これが終わったら少し休憩しよう。

アント あ、セミ親方だ。かっこいいなあ。力も強そうだし、兵隊アリの僕と代わったほうがいいんじゃないかな。

セミ親方 おお、アントじゃないか。お務め、ご苦労さん。

アント あ、こんにちは、セミ親方。お忙しそうですね。

ナレーション このセミ親方も、れっきとしたアリなのですが、昔、通常の倍はある巨大なセミを、立った一匹で巣まで運んできたことから、みんなにそう呼ばれています。親方は、土ぼこりで汚れた顔を手でぬぐい、まじめな顔で言いました。

セミ親方 なあアント。あいつらがこっちに向かってくるらしいぞ。気をつける。

アント あいつらって？

セミ親方 (ため息)“グレイト”だ。

ナレーション その言葉を聞くと、アントは思わず後ろに一、二歩下がってしまいました。

アント グ、グレイトって、…あの“グレイト”？

セミ親方 そうだ。赤い山の仲間も、川原の仲間も、みんなやられたらしい。ひでえやつらだ。同じアリ族なんだから、何も全滅させることはなかるう。全く、信じられん。

ナレーション “グレイト”。それは、その名を聞けば泣く子も黙るというアリの盗賊団で、巨大な2匹のリーダーに率いられていました。配下の兵隊アリの数は 1,000 とかも2,000 とも言われ、集団で別のアリの巣を襲い、すべて絶滅させては食料を奪っていく、死に神のような存在です。

セミ親方 アント、お前も、いつまでもママントの隣で寝ているようじゃダメだぞ。しっかりおれたちを守ってくれよ。

アント は、はい。

ナレーション そう返事はしたものの、アントの6本の手足はだれが見ても明らかなほどカクカク震えていました。でもその時は単なる励ましの言葉と思っていたのですが、それは事実になったのです。その日の夜から、アントはママントの隣で寝かせてもらえなくなりました。更に翌日…。

マイマイ隊長 兵隊アリのアント。君をここの第1門番兵に任命する。

ナレーション こう命令したのは、兵隊アリの総司令官で、たった1匹でマイマイカブリの攻撃を食い止めたことで、その名がついたマイマイ隊長でした。こうしてアントは、巣の門番兵の大役も任されてしまいました。彼は心の中で悲鳴を上げましたが、みんなはアントのためにはよいことだと喜んでくれました。

仲間1 おめでとう。

仲間2 頼んだよ。

仲間3 アント、よろしくね。

アント (モノローグ)嫌だよー。怖いよ。僕じゃダメだよ。よりによって何でこんなときに門番兵なんかになっちゃうんだよー。

マイマイ隊長 アントよ。知っていると思うが、現在“グレイト”が、この辺りに出沒している。何かあったらすぐ連絡しなさい。

アント はい、マイマイ隊長。すぐ連絡いたします。

マイマイ隊長 また時間で交代したときは、巣の周辺を巡回して、異状があればすぐ報告するように。

アント はい。

マイマイ隊長 もし敵に急襲されたら、命懸けで阻止してくれ。

アント はい、分かりました。では失礼いたします。

ナレーション アントはキッと触角を立て、敬礼をしてから隊長室を出ましたが、…

アント (モノローグ)ああ、弱ったな。“グレイト”が攻めてきたらどうしよう。

ナレーション そう言ってシュンと触角を垂らすと、重たい足取りで巣の入り口に向かいました。それから数日がたちました。アントは相変わらずビクビクしながら門番をしています。

交代兵 アント、交代だ。巡回に行ってきてくれ。

アント は、はい。じゃ行ってきます。

セミ親方 おーい、アント。頑張ってるな。大分門番兵らしくなってきたじゃないか。

アント ああ、セミ親方。まだまだですよ。

セミ親方 女王とみんなのためだ。しっかりやれよ。

ナレーション 肩に大きなアメ玉を担いだセミ親方が、大声でアントにゲキを飛ばしました。その声をあとに、いまだに震える足取りで、アントは巡回に出かけました。強い向かい風が吹いています。アントは波打つ草のトンネルをくぐっていきました。

アント あれ？ ストーンマウスさんが...いない。

ナレーション ケヤキの木に行ってみると、そこにいるはずのストーンマウスは姿を消していました。

アント ううん...どうしたんだろう。直ったのかな？

ナレーション その時でした。

ゴライアス1 おい、そろそろこの辺りのはずだぜ、ゴライアス(Goliath = ゴリアテ)2。

ゴライアス2 ああ。結構いいところらしいから楽しみだな、ゴライアス1。ガハハハハー。

ナレーション とっさに草の間に身を隠したアントの目に映ったものは、見たこともない、おそろしく巨大な2匹の兵隊アリで、その大きさはアントの3倍はありました。案とは驚きのあまり腰を抜かし、息もできないで目を丸くしていました。

アント (モノローグ)ここここいつらは...グググ“グレイト”の2人のリーダーじゃないか。

ゴライアス1 なあ、この先の緑の丘の連中は弱虫ばかりだから、2人だけで攻めてやろうぜ。明日までには片がつくさ。

ゴライアス2 いや、今回はおれたちの全勢力をもって、これまでにない猛攻撃を仕掛けてやろう。そうすりゃ、日暮れ前には片付くし、近くのアリ村にも見せしめになって、自分から降伏してくるようになるだろう。

ゴライアス1 なるほど。そうしよう。血祭りだ！

ナレーション 大変なことになりました。一刻も早く、マイマイ隊長にこのことを報告しなければなりません。しかしアントは身動き一つできません。心臓まで止まっているようです。平穏な原っぱの巣に、今、巨大な死の影が迫りつつありました。

< 後編 >

ナレーション ここはある山のふもとにある原っぱです。平和に暮らしていたアリたちに、今、同じアリ族の中でも残虐極まりない大盗賊団、“グレイト”の魔の手が迫っています。

アント (モノローグ)し、し、知らせなきゃ。

ナレーション そうつぶやいたのは、弱虫でどうしようもなく甘えん坊の門番兵アントです。案とは働きアリに生まれたかったのですが、なぜか兵隊アリとして生まれてきてしまったのです。彼は歩哨巡回当番から、城門の番兵に任命されてしまい、敵の

攻撃には真っ先にさらされるので、毎日ビクビクしながら務めに出ていたのでした。そして今日、交代後の巡回に来ていて、この2匹のリーダーの会話を偶然聞いてしまいました。早速隊長に知らせに戻ろうと思ったのですが、驚きのあまり腰が抜けて、体が全く動きません。

アント (モノローグ)ダ、ダ、ダメだ。動けない。それにしてもあのデカイ体。鋼鉄のように黒光りする肌。ノコギリのように研ぎ澄まされた触覚…。あいつらに襲われたら、きっと僕らは全滅だ。どうしよう。

ナレーション アントはやっとの思いでフラフラ起き上がると、まるでほうように巣に向かいました。きっとグレイと軍団はすぐ巣にやってくるはずです。必死になって巣の近くに来ると、にぎやかな笑い声が聞こえてきます。

アント (モノローグ)ま、間に合った…。

ナレーション アントは力を振り絞って、懸命に巣に向かいました。

仲間1 おお、アント。お帰り。どうした？ 顔色がすごく悪いぞ。

仲間2 アント。まだ交代の時間じゃないぞ。

アント あの、グ、グ、グレ…グレ…。

ナレーション 焦って言葉が詰まります。その時、アントの後ろのほうから大きな声がありました。

セミ親方 おーい、アント、見てみる。こんな獲物があったぞー。

ナレーション 見ると、大きなチョコレートの板を両手で持ち上げて、ニコニコして遠くから近づいてくるのは、働きアリの長を務めているセミ親方でした。

アント セ、セミ親方。あ、あの…。

セミ親方 はははあ。こりゃうまそうだ。みんな -、今夜はごちそうだぞ。

ナレーション その時でした。

セミ親方 アグ！

ナレーション 目の前で、セミ親方がバタッと倒れました。

仲間1 お、お、親方 -！

仲間2 セミ親方 -！

アント あ、あ、来たー！

ナレーション 倒れて動かないセミ親方の後ろから、ゴソゴソと無数の黒光りする兵隊アリが現れました。グレイ軍団です。いつしか目の前は、横1列黒1色となりました。何というおびただしい数でしょう。こちらの数をはるかに上回っています。その時、黒い列がさっと2つに分かれたかと思うと、後ろから巨大な2匹のリーダーアリが現れました。そう、アントの見たあいつらです。

仲間1 な、な、何てこった。マイマイ隊長に報告しなきゃ。

ナレーション ザッザッという無気味な音を立てて、グレイと兵たちは一步一步巣に近づいてきます。たちまちセミ親方の死体は黒い列に飲み込まれてしまいました。

アント あわわわわ...どうしよう。

ナレーション アントはどうすることもできず、ガタガタ震えています。その時、伝令の知らせを聞いた味方の兵隊アリが、マイマイ隊長を先頭に、巢の穴から完全武装して出てきました。

マイマイ隊長 こうなったら、全員、死力を尽くして戦うぞ! みんなでここを守るんだ。いいな!

全員 おおおー!

ナレーション 両軍はじりじり、じりじりと間合いを詰めます。

ゴライアス1 ほお。そんなかっこいい武装しても、おれたちにゃあまり意味ないぜ。

マイマイ隊長 “グレイト”! お前たちのしてきたことはすべて知っている。ここは渡さん。引き返せ。

ゴライアス1 おい、聞いたかゴライアス2。こいつ、どうかしてるぜ。おれたちに盾突こうとしているよ。

ゴライアス2 ワアーハハハ。よし、突撃!

全員 (口々に)おりゃ - 。ギャー。死ぬ!

マイマイ隊長 ひるむなー。入り口を守れ - !

ナレーション アントは、アントはどこでしょう。彼は入り口の一番奥にずるずると交代したまま、そこに震えて立ちすくんでいました。

マイマイ隊長 おい、アント。そこを絶対通すなー。守れ!

ナレーション アントにそう声をかけながら、歴戦の大勇士であるマイマイ隊長は、少しもひるむことなく、次々と“グレイト”の兵隊アリを倒しています。

ゴライアス1 ゴライアス2、あいつが隊長らしいぞ。

ナレーション “グレイト”のリーダーの二人は、隙を見て、マイマイ隊長の前後に回りました。いくら隊長でも、この二人を同時には相手にできません。

アント (モノローグ)隊長を助けなきゃ。でも、でも怖い。僕にはできない...

ナレーション その時です。

ママント アー――アント!

ナレーション その声は、彼の母でもある女王ママントでした。日ごろは優しいママントが、鬼のような顔つきで、何と城の一番奥の司令室から入り口まで出てきたのです。

アント ママント。こ、ここは危ない!

ママント 分かっています。でもここを突破されたら、この住民は全滅です。お前が神様から授かった兵隊アリという使命を果たせないなら、女王自ら戦うしかありません。さ、そこをどきなさい。

ナレーション そういいながら、不安がるアントを押しつけ、ママントは入り口から外に出ました。敵の最高権力者が表に出てくるのを見た“グレイト”の兵隊アリたちは、一斉にママントに襲い掛かります。

アント ママント ! ダメだ。死んじゃうよ。ママント、どうか中に入ってください!

(モノローグ) ママントが死んでしまう....

ナレーション その時でした。

神様(エコー) 行け!

アント え?

ナレーション どこからともなく声が聞こえてきます。

神様(エコー) 行け、アントよ。

アント だ、だれ?

神様(エコー) お前を形づくった者だ。さあ、お前の使命を果たせ。恐れるな。

アント みんな死ぬんだ。みんな、やられちゃう。も、もうダメだ。

神様(エコー) 恐れるな。お前を強くしてある。

ナレーション どこからの声かは分かりません。しかしその時、不思議なことが起こりました。アントの震えがピタリと止まったのです。そしてあんなに怖がっていたのに、内側から底知れぬ力があふれてくるではありませんか。

アント 母なる女王を守る。この巣を...みんなの命を守るぞ!

ナレーション そう言い放つと、一步一步アントは進みだし、徐々に駆け足になり、ついには弾丸のように敵陣のど真ん中に突っ込んでいきました。

アント 守るんだ !

ナレーション その時です。

(効果音) ドスーーン。(塊チーズを落とす音。)

ゴライアス1 ギャー―――!

ゴライアス2 ゴライアス1!

ストーンマウス アント君! チーズ持ってきたぞー

アント あ、あの声は!

ナレーション そう、それはストーンマウスでした。アントが命を救ったあのストーンマウスが、腕を組んで、敵の二人のリーダーの前に仁王立ちしているではありませんか。そのうちの1匹、ゴライアス1は、ストーンマウスが投げた岩のようなチーズの下敷きになって、ペシャンコに横たわっています。

ストーンマウス こいつらか、“グレイト”とかいうやつらは。口ほどにもないな。アント君。もう1人もやっちまおうぜ。リーダーがやられたら、敵は総崩れだ。

アント 分かった!

ナレーション こうしてアントとストーンマウスの二人は、残った敵のリーダー、ゴライアス2に立ち向かっていきました。しかし残った敵のリーダーも必死でした。鋼のようなアゴと、鋭い手足を風車のように振り回し、ものすごい形相で向かってきます。

ゴライアス2 おのれ、こわっば!

ナレーション ゴライアス2の振り下ろした一撃が、まさにアントを真っ二つに切り裂こうとした瞬間、

ママント あー ！

ナレーション 女王ママントが飛び出してきてアントをかばい、鋭い一撃を身に受けたのです。

アント ママをやったな!

ナレーション そう言ってアントが突き出した捨て身の一撃は、ゴライアス2の鋼のようなアゴを打ち砕きました。

アント ママ、ママ、しっかりして。ママ、死なないで!

ママント (苦しい息の下から)アント、よくお聞き。あなたの本当のつくり主は天の神様よ。わたしは、この神様が遠い昔、人間の世界にたった1人のみ子を使わされて、罪びとや弱い人の身代わりに命を捨てられたという話を聞いてた。わたしも、アリの女王として、愛する子供たちの役に立つときが来ればと、ずっと思ってきた。今、生まれ変わったお前を見て、わたしも...ママもうれしい。あとは...頼んだわよ。

アント ...ママント。ママ!!(泣く)

ナレーション これがアリの国の弱虫アントの物語です。あなたも、自分の弱さにガックリするときがあるかもしれません。自分の能力を超えた、あまりに大きな仕事を与えられて、神様の命令に背きたくなる時があるかもしれません。しかし神様は、一人一人に、その人だけのたまものを与えてくださっているのです。あなたは、それに気づいていますか?

(完)